

津波てんでんこ、および幸福解釈、および優先主義  
——若松良樹編『功利主義の逆襲』第1部の批評<sup>1</sup>  
浅野幸治

若松良樹編『功利主義の逆襲』（ナカニシヤ出版、2017年）の第1部に収められた3つの章、すなわち児玉聡の「第1章 津波てんでんこと災害時における倫理」および米村幸太郎の「第2章 欲求か快樂か、快樂だとしてもどのような快樂か？」および井上彰の「第3章 功利主義と優先主義——人格の別個性を切り口に」について批評する。児玉の論考は、トンチンカンである。米村の論考は、つまらない。他方、これは私の興味関心のゆえかもしれないけれども、井上の論考が、一番おもしろい。ただし井上の結論は、尻すぼみである。以下で、順に説明していこう。

児玉の主張は、こうである——津波てんでんこは、利己（主義）的ではなくて、功利主義的である（26頁）。しかし、功利主義に対して、「利己主義的だからダメだ」という批判をする人はいない。もちろん、板井広明が「第4章 古典的功利主義における多数と少数」の注9（113頁）で述べるように、「功利主義は利己主義であるという誤解」はある。しかし、それはたんなる誤解であって、批判として真剣に受け止めるほどの必要性はない。それどころか、功利主義は公平無私な哲学としてよく知られている。たしかに、ロールズが直接の批判対象とした厚生経済学は、利己主義的な人間、いわゆる「経済人」を前提としている。しかし、人間が利己主義的に行動するということは、功利主義の批判者たち——ロールズやノージックやドゥオーキン——によっても共有されている人間観というよりも人間的事実である。したがって、仮に児玉が、津波てんでんこが利己的だという批判に応えるにしても、それは、功利主義批判への反撃（つまり、功利主義の逆襲）とは何の関係もない。それが、「トンチンカンド」ということの趣旨である。

それでも、児玉は、津波てんでんこが利己的だという批判に応えるとしよう。児玉は、津波てんでんこは利己的ではないと弁明する。しかし、どうして児玉は、「利己的だ」という批判にたじろぐのか。そうではなくて、「利己的だ」という批判に対して、児玉は、「利己的であってどこが悪い」と応じるべきである。実際に、個人の利己的な行動が全体の幸福につながるというのが、アダム・スミス以来の由緒正しい伝統である。

<sup>1</sup> 本稿は、法理学研究会と京都生命倫理研究会と日本功利主義学会で共催した若松良樹編『功利主義の逆襲』合評会（同志社大学、2017年12月）で報告した原稿にほんの少しの加筆修正をしたものである。

ここには、功利主義を信じ（て内面化する）ことにまつわる、ややこしい問題がある。一言で言えば、功利主義的に行動すれば、功利主義的に正しくない結果になり、非功利主義的に行動すれば、功利主義的に正しい結果になる。例えば、大地震の後、ある人は自分自身に対して次のように言うでしょう。「お前は死んでもいい。お前は死んでもいいから、海のほうに行って、みんなに『津波が来るから逃げろ』と警告してこい。1人が生きて200人が死ぬよりも、200人が生きて1人が死ぬほうがいいのだ。」たしかに、この人の思考は、功利主義的に正しいように思われる。しかし、みんながこのように考えて行動すれば、どうなるか。みんなが死んでしまう。反対に、そんな余計なことを考えるよりも、みんなが「他の人のことなんか、かまっちゃらねえ。大急ぎで逃げなくちゃ」と感じて逃げるほうが、功利主義的に正しい結果になるだろう。だから、功利主義者は、人々に「功利主義を信じるな」と説得してまわらねばならない、という奇妙なことになる。

それでも兎玉は人がいいから、「津波てんでんこは利己的だ」という批判者を、「利己的でどこが悪い」と言って突き放すことができない。兎玉は、なんとか、「いや、そうじゃないんですよ。津波てんでんこは、利己的な行動指針ではなくて、全体の利益を考えた指針なんですよ」と言いたい。それに対して、批判者は、こう言い返すだろう。

たしかに、津波てんでんこを考案した人は、全体の利益を考えているのかもしれない。しかし、その助言に従って動く一般の人は、「ああ、そうですか。他の人のことなんか、かまっちゃらねえ。自分だけ逃げたらいいんですね」と思って行動するだろう。つまり、他人のことは考えず、自分の利益だけを考えて行動するわけだ。だから、やっぱり、利己的で不道德だ。

この批判者に対して、兎玉は、次のように応えるだろう。

同じく利己的に行動するにしても、自分の利益だけを考えて行動するのと全体の利益をも考えて行動するのでは違う。全体の利益を考えた行動する人の場合、自分の利益を考えるのは、全体の利益のためにすぎない。だから、そういう人は、利己的な人間ではまったくない。

つまり、粗野な利己主義者が余計なことをなにも考えずに逃げるのと、間接的功利主義を内面化した人が全体の利益を考えて逃げるのとでは違うというわけである。

こうして児玉は、津波てんでんこを（利己主義ではなく）間接的功利主義の1例として推奨する。

少し上の段落で私は、功利主義を信じ（て内面化する）ことにまつわる、ややこしい問題について述べた。その問題をも、児玉は間接的功利主義という考え方によって解決する。間接的功利主義って、すばらしい。

しかし、それに関して2点を述べたい。第1に、間接的功利主義の立場からすると、粗野な利己主義者が余計なことをなにも考えずに逃げる行動は、どう評価されるのか。正しいのか、正しくないのか。もし正しいのであれば、それで十分だろう。どうして児玉は、利己主義的な行動よりも間接的功利主義の行動を推奨するのか。もし正しくないのであれば、どうして正しくないのか。利己主義者の行動と間接的功利主義者の行動とではどこが違うのか。その違いを、結果だけに注目する功利主義の立場から説明できるのか。

第2に、私は、間接的功利主義者の論理をいささか奇妙だと感じる。というのは、間接的功利主義者は、自分が逃げるという行動を、全体の利益に訴えて正当化するからである。しかし、考えてみよう。各人の利益に価値があるから、全体の利益にも価値があるのだろう。それなのに、自分の利益を、全体の利益に訴えて正当化するというのは、どういうことか。全体の利益に価値があるから、それに貢献する限りで私の利益にも価値がある、というのだろうか。もし功利主義がそのような論理でものごとを考えるのだとすれば、私には本末転倒に思われる。

津波てんでんこは利己的だという批判に対する児玉の応答については、このくらいにしておこう。

津波てんでんこに対する、もう1つの批判は、津波てんでんこは従うのが心理的に難しいというものである。これも私には、深刻な批判だとは思われない。児玉の応答は、「心理的に難しくても、津波てんでんこは正しい」というものである。児玉のこの応答に関して、私には特に言うことがない。ただし、1つだけ気がかりな点があるので述べておく。児玉は、次のように述べる。

もし自分が地域の消防団員や、他人を助ける義務を持つ他の職業（たとえば警察官や消防隊員や医師）である場合は、このような状況で津波てんでんこの教えに従うことは正しくないと考える。（30頁）

つまり、一般人は逃げるべきだけれども、警察官や消防隊員は命懸けで人々を助けるべきだというのである。しかし、今回の東日本大震災では、多くの消防団員が犠牲になった。その理由は、活動を優先して、津波から逃げ遅れたからである。その

ような犠牲を、児玉は功利主義的に正当化するのだろうか。私たちは、多くの事故や災害の事例で、二次災害の危険性がある場合には救助活動が差し控えられるのを見聞きしている。私も、それが正しいと思う。もちろん、津波がいつ到達するのか、何時何分まで安全に活動できるのかを知ることは難しい。しかし、だからといって消防団員の生命を軽視する理由にはならない。むしろ、消防団員の安全の確保、退避指示の徹底が、今回の災害の教訓である。

ここまでは、津波てんでんこは利己的だという批判に対する児玉の応答につきあってきた。しかしそもそも、なぜ児玉は津波てんでんこを取り上げるのか。児玉は、次のように述べる。

災害対策はわれわれの倫理観に対する挑戦となりうる。(23頁)

つまり、編者である若松の言葉で言えば、津波てんでんこは「常識道德の教えに反する。」(11頁) どうも、若松の意図は、次のようなことであるらしい。

反直観論法

- 1、功利主義は、津波てんでんこを容認ないしは推奨する。
- 2、ところが、津波てんでんこは、常識道德の教えに反し、反直観的である。
- 3、したがって、津波てんでんこを容認する功利主義は、間違っている。

この反直観論法は、おそらく若松の意図としては、説得的でない。むしろ、若松としては、問題を次のように書き直したい。

- 1、津波てんでんこと常識道德の教えと、どちらが正しいのか。
- 2、このとき、常識道德の教えを前提して津波てんでんこは間違いだと主張することは、論点先取である。
- 3、だから、上の反直観論法は、成り立たない。津波てんでんこと常識道德の教えとどちらが正しいかを決するためには、別の視点が必要である。

このような若松の意図を児玉がどれだけ共有しているか、必ずしも定かではない。けれども、上で引用した児玉の文を、若松の意図にそって理解することにしよう。そうすると、要するに若松・児玉が言いたいのは、少なくとも、津波てんでんこは功利主義に対する反例にならないということであり、ひょっとしたら更に踏み込んで、津波てんでんこは常識道德の反例になるということである。これにどう応えたものか。私は、ある意味では賛成であり、別の意味では反対である。まず、津波てんでんこは功利主義に対する反例にならない——その通りである。しかし、だからといって、津波てんでんこは常識道德の反例になるわけでもない。私が理解する限り、若松・児玉の根本的な間違いは、津波てんでんこが常識道德の教えに反す

るという部分にある。たしかに、「困った人を助ける責任」（25頁）を常識道德の教えと同一視すれば、津波てんでんこは常識道德の教えに反する。しかし、若松がはからずも述べるように、「『困っている人を見殺しにするな』というのは常識道德の中核的な要素の一つ」（11頁）にすぎない。言い換えると、「困った人を助ける責任」は常識道德のすべてではない。常識道德の中には、自分の命を危険にさらしてまで他人を助ける必要はないという教えも十分に含まれている。なので、津波てんでんこが仮に常識道德の中の教えの1つに反するとしても、全体としての常識道德に反するという事にはならない。それどころか、津波てんでんこは、（常識）道德的直観に適っている。それは、すでに述べたように、自分の命を危険にさらしてまで他人を助ける必要はないという常識道德の教えも十分、理に適っていると思われるからである。

では、何が問題なのか。常識道德と功利主義で、どこが違うのか。児玉が言っているのは、せいぜい、津波てんでんこは功利主義によっても説明できるということである。これは、功利主義も捨てたもんじゃないでしょ、という弁明でしかない。

「津波てんでんこは、常識道德では説明できないでしょ」という部分がないからである。児玉や若松が「津波てんでんこは、常識道德では説明できない」と想定しているならば、それは間違いである。もう1つ、津波てんでんこは功利主義によっても説明できるということは、功利主義の弁明でしかなく、擁護にならない。なぜなら、児玉は、功利主義からは自然な結論として津波てんでんここという素晴らしい行為指針が出てくるということを書いていないからである。つまり、津波てんでんこは功利主義によって正当化されるかもしれないけれども、反津波てんでんこも功利主義によって正当化される可能性がある。実際に、児玉は、例外的な行為指針として、警察官や消防隊員は（逃げるのではなくて）命懸けで人々を助けるべきだと述べていた。ここの部分が、功利主義と常識道德とでは違う。

最後に、問題を解きほぐすために、私は、功利主義的思考と功利主義とを区別しておきたい。功利主義的思考は、かならずしも功利主義ではない。では、功利主義的思考とは何か。功利主義的思考とは、より良いほうがより良いという、まったく常識的な思考である。かくして私たちは、物事を選択するに際して、良し悪しを考量する。このように私たちは日常的に、（必ずしも功利主義ではないけれども）功利主義とよく似た思考法を行っている。しかし、それだけでは、まだ功利主義にならない。では、功利主義の特徴は何か。物事を選択や評価に際して考慮するのが1種類のものだけだという一元論が、功利主義の決定的特徴である。この1種類のもものは、功利主義の通常理解では、快樂ないし欲求充足である。他の要素や側面は、考慮に入れない。対称的に、常識道德は、様々な種類の価値を認める多元論で

ある。したがって、2つの選択肢を比較するに際して、快樂（ないし欲求充足）以外の他の点が同じである場合、常識道徳と功利主義は、同じように考え同じ結論に至る。それだけ、功利主義は常識的であり、常識道徳から解きほぐすのが必ずしも容易ではない。

次に米村の論考である。最初に、論考の要旨を「劇的に」簡単にまとめておこう。米村班は、次のように話し合った。

司会の米村 やっぱり、功利主義やな。幸福を最大化せなあかんで。でもその前に、幸福を定義しとかな、いかな。

ベンサムおじさん そんなん、快樂に決まっとうやないか。1に快樂、2に快樂、3、4も快樂、5も快樂や。

功利主義者1 でもそれは、ちょっと、下品やないですか。

功利主義者2 そしたら、「ああ、気持ちいい」というだけやなしに、やりたいと思ってることができたら、ええんやないか。

功利主義者3 でも、変なことをしたいと思ってるら、どうするん。

功利主義者4 うーん、それやったら、いろんなことをよく調べてよく考えてからやりたいと思うことができていること、これを幸福と定義したら、どないや。

功利主義者5 いろんなことをよく調べてよく考えても、やっぱり、変な人やったら変なことをやりたいと思うでしょ。

功利主義者6 ほな一体、どないしたらええっちゅうねん。

功利主義者7 結局、本人が「これでええ」と思ってるら、ええんやないか。

功利主義者8 けど、本人が勝手に「これでええ」と思ってたって、間違ってるら意味ないやん。

功利主義者9 そんなことあらへん。間違っとなんか、かまへんのや。本人が幸せや思うてたら、それで幸せなんや。

功利主義者10 それやったら、「気持ちいい」説でも同じやろ。本人が「気持ちいい」と感じてたら、それでええやんか。

功利主義者11 それどころか、「これでええ」っちゅう評価に「気持ちいい」という感覚が含まれとらへんかったら、おかしいで。

司会の米村 なんや、やっぱり、ベンサム先生の「気持ちいい」説に戻ってくるんやな。

しかし、そもそも議論の出発点は、ベンサム流の感覚的快樂説が不十分だということにあった。上での米村班の話し合いは、功利主義者内部の話し合いである。

功利主義者たちが自分たちの間で、幸福の主観的定義について論争している。その様は、あれもダメ、これもダメということである。それを聞いた非功利主義者は、「やっぱり、功利主義って、見込みがないんや」という印象を受ける。なるほどたしかに、米村は、多様性問題と説明問題には応答している。しかし、疎外の問題に対する米村の対応は、開き直りにすぎない。その開き直りの論理は、「気持ちいい」という要素がなかったなら、どうして幸福と言えるのか、というものである。しかしだからと言って、「気持ちいい」という感覚的快樂が幸福と同一だということにはならない。米村は、感覚的快樂説が「依然として十分に魅力的な選択肢である」と言い（53頁）、若松も感覚的快樂説が「頑強な生命力を保っている」と述べる（13頁）。しかし、この開き直りの論理に、そのような説得力があるとは思われない。

常識道徳の立場からすると、「気持ちいい」というのは、たしかに幸福の1要素である。しかし、1要素にすぎない。したがって、他の考慮によって、たとえ「気持ちいい」という感覚的快樂があったとしても幸福でないということがありうる。そのような「偽りの快樂」の場合、米村は、幸福でないという直観のほうを退けるべきだと主張する。しかし、そうするとき米村は、理論に合わせるために現実を曲げている。

次に井上の論考では、何が問題になっているか。ロールズは、功利主義を批判した。その批判は、功利主義は個人の個別性を尊重していないというものである。ロールズは、功利主義に代わる対案として、格差原理を主張した。ところが、個人の個別性を尊重していないという批判は、ロールズ自身の格差原理にも当てはまってしまうのではないか、という疑いがある。この疑いは、ロールズ解釈としては誤解である。しかし、井上は、ロールズ解釈をしたいのではない。ロールズの格差原理には、それを下支えする原理として優先主義がある。井上は、この優先主義に関心がある。そして、井上の判定では、個人の個別性を尊重していないという批判は優先主義にも当てはまる。ということは、井上の結論には、「なんだ、ロールズ先生ダメじゃん」という含意がある。

すでに述べたように、上の疑いは、ロールズ解釈としては誤解である。にもかかわらず、井上の論考は、ロールズが意外にも功利主義的であること、ロールズの思想に意外にも功利主義的な側面があることを照らし出してくれる。もともと、格差原理と功利主義は近い。富の配分を考えてみよう。そこでは一般に限界効用逓減の法則が成り立つ。したがって、ある一定の富を誰に配分しようかと考えたとき、もっとも恵まれない人たちに配分することが、（総効用の最大化のために）

一番効率的である。だから、功利主義は、格差原理を要求するとさえ思われる。では、功利主義を批判するロールズ思想と功利主義とでは、どこが違うのか。ロールズ思想では、格差原理に先行して、個人の自由が保証される。その自由の中には、自分の身体は自分のものだという自己所有権も含まれる。したがって、身体は再配分の対象にならない。

翻って、功利主義は、眼球の再配分を容認ないし要求してしまうように思われる。眼球の再配分とは、こういう話である。一方に、両目とも見えない人がいる。他方に、両目とも見える人がいる。その場合、両目とも見える人から片方の眼球を、両目とも見えない人に移植したらどうか。両目とも見えない人は、健全な眼球1つを移植してもらって片目の視力を回復するでしょう。そうすると、二人の総効用は大きく増大する。健全な眼球を1つ失う人の効用の損失よりも、健全な眼球を1つもらう人の効用の増大のほうがずっと大きいからである。したがって、そのような眼球移植を功利主義は容認ないし要求するように思われる。この点がたしかに、ロールズ思想と功利主義とでは違う。

井上の論考に戻ろう。論考の前半(59頁～63頁)で、井上は、ノージックによる功利主義批判とロールズによる功利主義批判を区別する。さらにロールズによる功利主義批判に、2つの意味を区別する。しかし、それら3通りの批判は、1つの同じ批判の3つの側面である。山田太郎君と佐藤明子さんで考えてみよう。山田君と佐藤さんは、それぞれ別々の存在だ——これが存在論上の主張である<sup>2</sup>。したがって、山田君と佐藤さんをあたかも1人であるかのように扱うことは、間違いだ——これが、個人の場合の道徳的考慮と社会の場合の道徳的考慮は違うという批判である。したがってまた、山田君が2で佐藤さんが1なのか、山田君が1で佐藤さんが2なのかで大きく違う——これが、配分のあり方は重要な問題になるという批判である。この中で根本にあるのは、山田君と佐藤さんが別々の存在だという主張である。個人の場合の道徳的考慮と社会の場合の道徳的考慮は必然的に違う、ということにはならないかもしれない。1人世帯がありうるように、君主1人だけから成る国家もありうるかもしれない。その場合、個人の場合の道徳的考慮と国家の場合の道徳的考慮は違わないだろう。個人の場合の道徳的考慮と社会の場合の道徳的考慮が違うのは、社会は通常、複数の人々から構成され、その人たちは別々の個

<sup>2</sup> ちなみに井上は、「われわれは、ロールズが存在論的な意味での人格の別個性が問われてくる議論を展開しているとみるべきではない(Scheffler 2003: 441-442)」と述べて、シェフラーに言及する。しかしシェフラーは、言及された箇所では、ロールズ解釈をしているわけではなくて、サンデルによるロールズ解釈を退けているにすぎない。つまり、ロールズは、人格についてサンデルによって編み出された奇抜な見方をしていて、ごく普通の経験的な個人を念頭に置いており、その点はノージックと共通である。

人だからである。

井上の論考は、71頁から79頁が難しい。なので、私に井上の議論が理解できているかどうか、心もとない。けれども、分からないことを分からないこととして質問しよう。66頁から74頁の結論は、優先主義は「分配の内在的考慮——分配に関わる別個性を充たすもの——を支える理念として」（74頁）説得的でない、ということだと思われる。言い換えると、優先主義は「分配に関わる別個性を尊重」（74頁）しているけれども説得的ではない、ということだと思われる。しかし、結論部で井上は、優先主義が「分配に関わる別個性……の要件を充たすものとはなっておらず」とまとめる（80頁）。この点で、井上は、第4節「優先主義批判一」の結論（74頁）と論考全体のまとめ（80頁）とがずれているのではないか。

いずれにせよ、水準低下批判は、優先主義が説得的でないという批判であって、優先主義が個人の個別性を尊重していないという批判ではないと理解しよう。そうすると、優先主義が個人の個別性を尊重しているかどうかは、もっぱら井上の論考の第5節で論じられることになる。すでに述べたように、この第5節「優先主義批判二」も、難しい。まず、個人内の選択状況と個人間の選択状況に関してオーツカとヴァーアヘーブがあげる事例（75頁と76頁）が分かりにくい。どうも、こういうことを念頭において考えたらよいようである。個人内の選択状況では、親が自分の一人っ子について2つの選択肢を比較考量する。個人間の選択状況では、親が自分の2人の子供の間で選択肢を比較考量する。私には、どちらの場合も、優先主義の判断が適理的であり、道徳的直観に適うと思われる。しかし、オーツカとヴァーアヘーブによれば、個人内の選択では、優先主義は適理的でなく、道徳的直観に合わない。どうしてなのだろうか。オーツカとヴァーアヘーブの「Reply to Crisp」によれば、個人内の選択では、犠牲が忍受されうるからということのようである（p. 110）。いずれにせよ、オーツカとヴァーアヘーブによれば、個人内の選択に関して優先主義は道徳的直観と齟齬をきたす。それが問題であるらしい。井上の大まかな趣旨も、次のようなものである。個人内の選択状況と個人間の選択状況は違う。ところが、優先主義は、その違いを無視して、「より不遇な者（状況）への利益供与の優先性を常に主張する」（76頁）。しかし、そもそも、どうして個人内の選択が問題になるのだろうか。通常は、個人内の選択は、当人の自由である。そのゆえに、オーツカとヴァーアヘーブの事例では、他人が判断することになっている。

そこで、個人内の選択では、オーツカとヴァーアヘーブが言うように、犠牲が忍受されうるし、さらには期待効用の最大化が合理的でありうるとしよう。しかし、そのことは、問題でなかった。問題は、そのような思考法を個人間の場合に拡張することであった。そこで、個人間の選択原理として、優先主義が考えられた。どうし

て、個人内の場合にも優先主義を適用しようとするのか。初めから、優先主義は個人間の配分原理として考えられた。よって、仮に優先主義が個人内の選択状況を適切に扱えなかったとしても、それが何の問題になるのか。

井上の結論に行こう。井上の結論は、すでに述べたように、優先主義は、個人の個別性を尊重していないという批判を免れない、というものである。井上の論考の題名に照らして言えば、功利主義が、個人の個別性を尊重していないという批判に晒されるのと同じように、優先主義も、個人の個別性を尊重していないという批判に晒される。これを功利主義者に言わせれば、「ロールズよ、お前もか」ということになる。では、どういう意味において、ロールズは個人の個別性を尊重しないのか。ここからは、井上の論考を少し離れて、ロールズを擁護してみたい。ロールズが自己所有権を認めることは、すでに述べた。にもかかわらず——これがロールズの巧妙な点である——ロールズは、内的資源（才能など、個人の持って生まれた性質）の配分は「道徳的観点からは恣意的だ」と主張する。したがって、内的資源を活用して得られる富の配分も恣意的である。これが意味するのは、富の配分に自然的な正しさがないということである。だから、富の配分は、人間が自由に決めることができる。実際に、そういうことを、人々は原初状態で社会の基本構造を考えたときに行なっているのである。

功利主義は、平等主義ではない。ただし、富の配分に関して限界効用逓減の法則が成り立つ限り、功利主義は、平等主義的な性格を帯びる。他方、格差原理は、まったく平等主義的ではない。格差原理は、格差の導入を正当化するための原理である。言い換えると、格差原理が導入される前の初期状態は、均等配分と想定されている。どうしてか。3つの考慮がある。第1に、すぐ上の段落で述べたように、誰も、平均よりも大きな取り分を要求する道徳的資格がない。第2に、富は社会的に生産され、社会的協働の産物である。だから、富は、最初からみんなのものである。第3に、社会契約は、全員の合意によって成り立つ。言い換えれば、すべての人が拒否権をもつ。誰でも、平均より少しの取り分であったならば、「こんなん、いやだ」と感じるだろう。そして誰でも、そういう境遇に陥りたくないと思うだろう。これらのうち、第3の考慮は少し弱いかもしれない。けれども、第1と第2の考慮だけでも十分明らかのように、富の配分に関するかぎり、ロールズにとって、個人の個別性など、最初から問題でない。だから、格差原理は、最も恵まれない人たちの状況が向上する限り、非常に大きな格差をも許容する。これは、功利主義が、総効用が増大する限り、非常に大きな格差をも許容するのと同様である。

では、個人の個別性は、どこで担保されるのか。個人の自由が保証される。すでに述べたように、この自由の中には、自己所有権が含まれる。ただし、ノージック

ならば、才能などの内的資源を自己所有権の中に含める。そして、富の再配分のために金持ちに課税するのは強制労働と変わらないと主張する。それに対して、ロールズは、「各自の身体は各自が自由に使うことができる。しかし、社会的に生産された富の配分は、別問題だ」と言うだろう。これを所有権の用語で言えば、ロールズは、内的資源の使用権と収益権とを区別して、使用権は各自のものと認めるけれども収益権はみんなのものに見なしている。

ロールズにおいて、個人の個別性が尊重されるのは、そこだけではない。格差原理にも、個人の個別性が尊重される局面がある。格差原理は、あらゆる格差を認めるわけではない。格差原理が格差の導入を容認するのは、最も恵まれない人たちの状況が改善される場合である。格差の導入が許されないのは、最も恵まれない人たちが置き去りにされる場合や最も恵まれない人たちの状況を悪化させて別の人たちの状況を改善するような場合である。最も恵まれない人たちの状況が悪化させられる場合、その人たちが異を唱えることは明らかである。最も恵まれない人たちの状況が置き去りにされて改善されない場合にも、その人たちは異を唱えるだろう。ということは、格差原理は、最も恵まれない人たちがその他の人たちとは別の存在であることをはっきりと認めているのである。この点で、ロールズの格差原理は、功利主義と違う。

では、どうして格差原理を導入するのか。格差原理は、最も恵まれない人たちの状況を向上させるために導入される。したがって、格差原理は、その他の人たちの状況をも（均等配分と比べて）向上させる。ということは、格差原理は、すべての人の状況を向上させるために導入される。雑な言い方をすれば、格差原理は、「経済成長によって、最も恵まれない人たちの状況を向上させよう」と言っているのである。功利主義は、総効用の最大化をよしとする。格差原理は、最も恵まれない人たちの状況の最高化をよしとする。どちらも、実践的には、経済成長をよしとする含意をもつ。その点で、格差原理は、功利主義の現代版、ないしは功利主義の生まれ変わりと言ってもよい。おそらく、格差原理が社会的に大きな影響力を持ちえたのは、この故にである。

参考文献

- Crisp, Roger. "In Defence of the Priority View: A Response to Otsuka and Voorhoeve." *Utilitas* 23-1 (2011): 105-8.
- Otsuka, Michael and Alex Voorhoeve. "Why It Matters That Some Are Worse Off Than Others: An Argument against the Priority View." *Philosophy and Public Affairs* 37, No. 2 (2009): 171-99.
- . "Reply to Crisp." *Utilitas* 23-1 (2011): 109-14.
- Porter, Tomas. "In Defence of the Priority View." *Utilitas* 24-3 (2012): 349-64.
- Scheffler, Samuel. "Rawls and Utilitarianism." In Samuel Freeman (ed.), *The Cambridge Companion to Rawls* (Cambridge University Press, 2003): 326-59.